

---

---

# 日本の大学生の韓国、韓国人、韓国語に対する好感度

## ——韓国語学習者・非学習者別に——

金 庚芬

---

### 1. はじめに

日本と韓国は、地理的にも歴史的にも近い関係であり、価値観や文化を共有できる部分を有する国である。しかし、近い隣国であるがゆえに、複雑な感情や意識を抱いていることも事実である。2015年の日韓国交正常化50周年を迎え、未来志向の日韓関係、相互理解のために、日本と韓国の様々な世代が、国・人・ことばに抱くイメージ、とりわけ相手への好感度、自己への好感度、他者から見た好感度に関する調査研究を行った。本稿は、その研究の一部である、日本の大学生の韓国、韓国人、韓国語に対する好感度及び、そこに影響する要因を分析した結果を報告することを目的とする。

### 2. 先行研究

イメージ関連の研究<sup>1)</sup>として、1996年～1998年に世界28カ国で実施した国際比較調査があり、これは日本と外国の人々が抱く日本や日本語に対するイメージに関する調査である。また、1990年代に長期にわたり行われた、NHK放送文化研究所による日韓テレビ報道比較調査研究では、テレビ報道と世論の日韓比較が行われ、世論における相互のイメージに変化が見られることや、そこにはテレビ報道が深く関連していることが報告されている(鮑戸他 2000)。

その後、行われた主な日韓のイメージ調査として、齊藤(2004)、生越(2006)では、それぞれの言語学習の有無が相手国のイメージ形成に影響すると報告している。また、呉正培<sup>2)</sup>(2008、2012)では、韓国の大学における日本語学習者と非学習者との日本人イメージ及びその要因を分析している。

さらに、金庚芬他(2015、2016a-c、2016)では、既存の日韓イメージに関する調査研究の成果を踏まえながら、日韓を同軸に置き、小学生、高校生、大学生及び成人の多様な世代を調査対象とした大規模調査<sup>3)</sup>を行った。そこでは、相手へのイメージに加え、自己に対するイメージ、相手からどのようなイメージを持たれているかについての実態分析と、それらのイメージ形成の諸要因を明らかにする新たな研究アプローチを試みた。その結果、相手の「国、人、ことば」には、日本では、「ど

ちらとも」といった好き嫌いとはっきり言わない消極的なイメージが多い一方、韓国では、対国では否定的なイメージがより多く、対人では、否定的なイメージはかなり減り、その代わり消極的なイメージが増え、対国とは異なる傾向を見せている。さらに、対ことばでは、消極的なイメージが先行するものの、肯定的なイメージが対国・人に比べ最も多いことから、相対的に肯定的なイメージを持っていることが確認された。相手の国に興味を持っている人の割合は、日本よりも韓国で高かった。また、調査対象別に見ると、韓国の成人グループを除く小学生、高校生、大学生では、日本に興味のある人は、概ね日本に肯定的なイメージを持っている。また、相互に関心を持っている分野としては、人々の日常的な生活や行動などの様式と、価値を身近に共有できる分野が多かった。日韓ともに、主に、国内テレビ・インターネットから相手国の情報を得ていて、とりわけ、日本の全年代層はテレビから、韓国は、小学生を除く各年代層がインターネットから最も多い情報を得ている。さらに、相手国のことばに関して、興味、学習経験、学習意思がある人の割合は、いずれも韓国の方が日本より高く表れ、それぞれの有無と好感度は関連があることが報告されている。本稿は、同研究の一部である、日本の大学生の韓国、韓国人、韓国語への好感度調査の分析結果の報告である。

### 3. 調査概要と分析方法

アンケート調査は、2014年10～12月に実施した。日本では、東京都及び首都圏の大学15校の教員に直接依頼し、大学生2～4年生368名の有効サンプルが得られた。大学生グループには、相手国のことばを専攻もしくは、選択科目として受講している学生が約4割含まれている。調査項目は、イメージの認識対象となる国・人・ことばに抱くイメージの詳細（自由記入）と好感度（7件法）、個人属性、関心分野、経験、情報源、インターネット利用状況などの諸要因で構成される。

本稿では、調査対象ごとに、韓国への好感度及び、興味の有無、関心分野、インターネット利用、相手国のことばへの学習経験、意思などの諸要因を分析する。

調査協力大学生368名は、韓国語を習っていない学生、外国語として韓国語を選択している学生、韓国語を専攻としている学生の3つのグループに分類できる。詳細は、表1の通りである。

表1 調査協力者の詳細

	韓国語非専攻・選択	韓国語選択	韓国語専攻	不明	計
人数 (%)	198(53.8)	102(27.7)	45(12.2)	23(6.3)	368(100.0)

調査に協力してくれた学生の詳細は、韓国語を習っていない「韓国語の非専攻・選択」が198名、選択科目として受講している「韓国語選択」102名、韓国語を専攻としている「韓国語専攻」45名である。なお、以後示すグループ名は、韓国語の非専攻・選択は「非選択」、韓国語選択は「選択」、韓国語専攻は「専攻」と表記する。

次の表2に、男女の比率を示す。

表 2 調査協力者の性比

		非選択	選択	専攻	計
男子	人数 (%)	99 (50.0)	20 (19.6)	4 (8.9)	123 (35.7)
女子	人数 (%)	99 (50.0)	82 (80.4)	41 (91.1)	222 (64.3)

「非選択」は男女それぞれ99名であるが、「選択」は男子20名、女子82名、「専攻」は男子4名、女子41名で、韓国語を選択、または専攻している学生は、女子が多い。次に、好感度の分析結果を述べる。

#### 4. 分析結果

まず、日本の大学生が抱く韓国の国や人、ことばに対する好感度の結果を示し、その後、その好感度に影響する要因の分析結果を示す。なお、好感度は、「1. 非常に嫌い、2. 嫌い、3. やや嫌い、4. どちらとも言えない、5. やや好き、6. 好き、7. 非常に好き」という7段階で評定されている。

##### 4.1 韓国・韓国人・韓国語に対する好感度

日本の大学生が抱く、韓国の国や人、ことばに対する好感度を分布特性から分析する。

###### (1) 韓国に対する好感度

表3に、日本の大学生が抱く、韓国に対する好感度を示す。

表 3 日本の大学生の韓国への好感度

7段階の区分⇒		7	6	5	4	3	2	1	計
非選択	人	5	20	39	79	25	18	4	190
	%	2.6	10.5	20.5	41.6	13.2	9.5	2.1	100.0
選択	人	12	39	23	21	3	1	2	101
	%	11.9	38.6	22.8	20.8	3.0	1.0	2.0	100.0
専攻	人	2	23	9	7	3	0	0	44
	%	4.5	52.3	20.5	15.9	6.8	0.0	0.0	100.0
計	人	19	82	71	107	31	19	6	335
	%	5.7	24.5	21.2	31.9	9.3	5.7	1.8	100.0

註)7:非常に好き, 6:好き, 5:やや好き, 4:どちらとも言えない, 3:やや嫌い, 2:嫌い, 1:非常に嫌い

表3に示したように、まず、韓国への好感度は、全体的には、「4どちらとも言えない」が31.9%で最も多く、次いで、「5やや好き」「6好き」がそれぞれ2割以上表れている。グループ別に見ると、「非選択」はどちらとも言えないという傾向が最も多く見られるが、「選択」と「専攻」グループは、好きの傾向を見せている。グループ別の韓国への好感度を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。

次は、韓国人への好感度である。

## (2) 韓国人に対する好感度

表4に、日本の大学生が抱く、韓国人に対する好感度を示す。

表4 日本の大学生の韓国人への好感度

7段階の区分⇒		7	6	5	4	3	2	1	計
非選択	人	9	17	42	83	23	11	4	189
	%	4.8	9.0	22.2	<u>43.9</u>	12.2	5.8	2.1	100.0
選択	人	11	43	16	24	4	3	0	101
	%	10.9	<u>42.6</u>	15.8	23.8	4.0	3.0	0.0	100.0
専攻	人	2	19	13	7	0	2	1	44
	%	4.5	<u>43.2</u>	29.5	15.9	0.0	4.5	2.3	100.0
計	人	22	79	71	114	27	16	5	334
	%	6.6	23.7	21.3	<u>34.1</u>	8.1	4.8	1.5	100.0

註)7:非常に好き, 6:好き, 5:やや好き, 4:どちらとも言えない, 3:やや嫌い, 2:嫌い, 1:非常に嫌い

表4から分かるように、韓国人に対する好感度は、全体的に「4どちらとも言えない」が34.1%で最も多く、続いて、「5やや好き」「6好き」がそれぞれ2割以上という結果で、表3の韓国に対する好感度と類似した傾向である。「非選択」ではどちらとも言えないとの回答が43.9%であるのに対し、「選択」「専攻」では好きという回答が4割を超えている。なお、「専攻」は「韓国人」への好感度が、「韓国」と比べ、約9ポイント低くなっている。グループ別の韓国人への好感度を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。

次は、韓国語への好感度である。

## (3) 韓国語に対する好感度

表5に、日本の大学生が抱く、韓国語に対する好感度を示す。

表5 日本の大学生の韓国語への好感度

7段階の区分⇒		7	6	5	4	3	2	1	計
非選択	人	5	11	28	120	15	7	3	189
	%	2.6	5.8	14.8	<u>63.5</u>	7.9	3.7	1.6	100.0
選択	人	17	44	16	16	3	3	2	101
	%	16.8	<u>43.6</u>	15.8	15.8	3.0	3.0	2.0	100.0
専攻	人	9	26	4	5	0	0	0	44
	%	20.5	<u>59.1</u>	9.1	11.4	0.0	0.0	0.0	100.0
計	人	31	81	48	141	18	10	5	334
	%	9.3	24.3	14.4	<u>42.2</u>	5.4	3.0	1.5	100.0

註)7:非常に好き, 6:好き, 5:やや好き, 4:どちらとも言えない, 3:やや嫌い, 2:嫌い, 1:非常に嫌い

表5に示したように、韓国語に対する好感度は、全体的に「4どちらとも言えない」が42.2%で最も多く、次に「6好き」が2割以上である。グループ別の好感度は異なる傾向を見せており、「非選択」はどちらとも言えないと答えたのが6割以上を占めているのに対し、「選択」の4割以上と「専攻」の6割弱は好きと答えている。グループ別の韓国語への好感度を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。この結果から、ことばを知っていることや習っていることと、ことばへ

の好感度は関連のあることが読み取れる。それについては、後述の言語要因でも述べる。

## 4.2 好感度と形成要因

4.1では、日本の大学生の韓国・韓国人・韓国語に対する好感度の実態を分析した。ここでは、好感度形成の要因に関する分析結果を述べる。分析に用いる諸要因は、韓国への興味、訪問の有無、韓国人との接触、関心分野という興味要因と、韓国語への興味、言語学習、学習意思という言語要因で構成される。

### 4.2.1 興味要因への分析結果

#### (1) 韓国への興味、訪問、接触

表6に、韓国への興味の有無に関する結果を示す。

表6 韓国への興味の有無

		非選択	選択	専攻	計
韓国興味あり	人数 (%)	82(42.7)	80(79.2)	45(100.0)	207(61.2)
韓国興味なし	人数 (%)	110(57.3)	21(20.8)	0(0.0)	131(38.8)

表6に示したように、韓国に興味・関心を持っているのは、「非選択」42.7%(82名)、「選択」79.2%(80名)、「専攻」は100%(45名)で、全体的には6割以上が興味を持っていると答えている。なお、グループ別の韓国への興味有無を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。したがって、韓国への興味と韓国語学習は関連のあることが分かり、興味があれば韓国語を学習する、または韓国語を学ぶことで韓国に興味を持つようになることが読み取れる<sup>4)</sup>。

続いて、韓国を訪問したことの有無をたずねた結果を表7に示す。

表7 韓国訪問の有無

		非選択	選択	専攻	計
韓国訪問あり	人数 (%)	19(10.1)	50(50.0)	40(88.9)	109(32.7)
韓国訪問なし	人数 (%)	169(89.9)	50(50.0)	5(11.1)	224(67.3)

表7から、韓国を訪問したことのある人は、「非選択」10.1%(19名)、「選択」50.0%(50名)、「専攻」は88.9%(40名)で、全体的には3割以上が訪問したことがあると答えている。訪問経験は、「非選択」とその他のグループの差がかなり大きいことが分かる。なお、グループ別の韓国訪問の有無を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。

加えて、大学生の韓国訪問の目的を複数応答でたずねたところ、旅行(94名)、留学(32名)、学校の行事及び親戚訪問(各16名)の順であった。

次に、韓国人と接触したことがあるかをたずねた結果を表8に示す。

表 8 韓国人との接触の有無

		非選択	選択	専攻	計
韓国人接触あり	人数 (%)	99(51.6)	82(81.2)	42(95.5)	223(66.2)
韓国人接触なし	人数 (%)	93(48.4)	19(18.8)	2(4.5)	114(33.8)

表8に示したように、韓国人と接触したことがあるのは、「非選択」51.6%(99名)、「選択」81.2%(82名)、「専攻」95.5%(42名)で、調査大学生の約67%が何らかの形で、韓国人と接触したことがあると答えている。なお、グループ別の韓国人との接触の有無を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。

また、接触時の使用言語を複数応答でたずねた結果、日本語使用(195名)が最も多く、それに続き、韓国語(99名)、英語(62名)の順であった。

## (2) 関心分野、インターネット使用

図1に、日本の大学生の韓国に対する関心分野(複数回答)を高い順に示す。なお、関心分野として用意した各項目は、呉正培(2008)の分類を一部修正したものである。

日本大学生の韓国関心分野

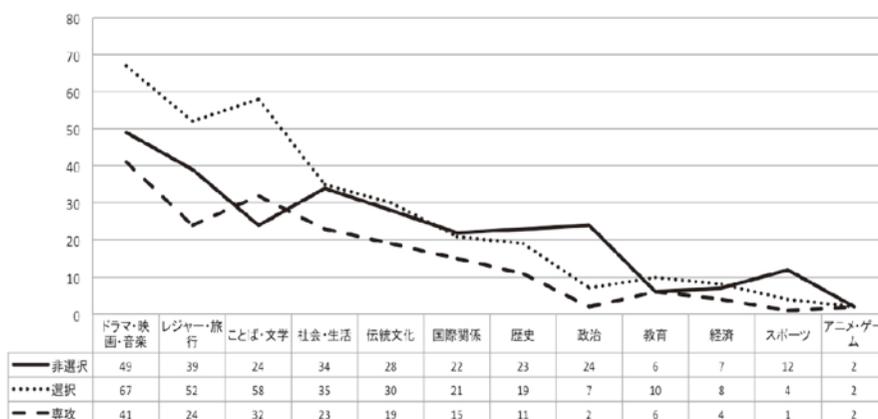


図 1 日本の大学生の韓国に対する関心分野

図1から分かるように、日本の大学生は、韓国について、「ドラマ・映画・音楽」(157名)、「レジャー・旅行」(115名)、「ことば・文学」(114名)、「社会・生活」(92名)、「伝統文化」(77名)、「国際関係」(58名)、「歴史」(53名)、「政治」(33名)の順で関心を示している。ドラマや音楽などのエンターテインメントや旅行、社会についての関心は、グループ間の違いはなく、概ね共通して関心のある分野であることが分かる。一方、「選択」や「専攻」はことばへの関心が高く、「非選択」は他のグループに比べ「政治」への関心が高い。

ところで、金庚芬他(2016c)によれば、日本の大学生は、韓国に関する情報を「国内テレビ・ラジオ」(61.3%)と国内インターネット(72.1%)から主に得ており、他

の世代（平均44.9%）に比べ、インターネット使用が最も多い。ここでは、それに関連するより詳細な分析結果をまとめる。

まず、インターネット使用時間は、調査対象の半数ほどが1日2、3時間の使用で、主に、ホームページ、動画、SNS、ブログを利用ツールとして用いている。次に、インターネットで見かける韓国関連の記事の内容についてたずねた結果を以下のように示す。

表9は、韓国関連の好意的な記事、表10は、否定的な記事を見かけると答えた結果である。

表に用いる7段階の区分は、「1. よく見かける、2. 見かける、3. たまに見かける、4. どちらとも言えない、5. あまり見かけない、6. 見かけない、7. 全く見かけない」である。なお、表の説明は、大まかな傾向を示すために、「1~3」を「見かける」「4」は「どちらとも」「5~7」は「見かけない」とする。

表 9 韓国に関する好意的な記事

7段階の区分⇒		1	2	3	4	5	6	7	計
非選択	人	2	15	38	34	54	27	15	185
	%	1.1	8.1	20.5	18.4	29.2	14.6	8.1	100.0
選択	人	10	21	21	17	19	10	2	100
	%	10.0	21.0	21.0	17.0	19.0	10.0	2.0	100.0
専攻	人	4	7	15	5	12	1	1	45
	%	8.9	15.6	33.3	11.1	26.7	2.2	2.2	100.0
計	人	16	43	74	56	85	38	18	330
	%	4.8	13.0	22.4	17.0	25.8	11.5	5.5	100.0

表9の結果をまとめると、まず全体的には、韓国に関する好意的な記事を「見かける」が40.2%、「見かけない」が42.8%で似た傾向である。しかし、グループ別に見ると、「非選択」は「見かける」29.7%、「見かけない」51.9%であるのに対し、「選択」は「見かける」52.0%、「見かけない」31.0%、さらに、「専攻」は「見かける」57.8%、「見かけない」31.1%で、「非選択」と「選択」「専攻」の結果が正反対であることが分かる。グループ別の韓国関連の好意的記事を見かける率を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p < 0.01$ )。「選択」「専攻」の半数以上は、好意的な記事を見かけると回答しており、それは、興味のある国について進んで調べたり、現地の情報を直接収集したりすることから、好意的な情報を取得しているのではないかと考えられる。

表 10 韓国に関する否定的な記事

7段階の区分⇒		1	2	3	4	5	6	7	計
非選択	人	40	55	45	16	12	13	4	185
	%	21.6	29.7	24.3	8.6	6.5	7.0	2.2	100.0
選択	人	17	33	27	10	7	4	2	100
	%	17.0	33.0	27.0	10.0	7.0	4.0	2.0	100.0
専攻	人	11	15	13	4	1	0	1	45
	%	24.4	33.3	28.9	8.9	2.2	0.0	2.2	100.0
計	人	68	103	85	30	20	17	7	330
	%	20.6	31.2	25.8	9.1	6.1	5.2	2.1	100.0

表10を見ると、まず全体的には、韓国に関する否定的な記事を「見かける」が77.6%、「見かけない」が13.4%で、否定的な記事を圧倒的に多く見かけることが分かる。グループ別に詳しく見ると、「非選択」は「見かける」75.6%、「見かけない」15.7%で、「選択」も「見かける」77.0%、「見かけない」13.0%、「専攻」は「見かける」86.6%、「見かけない」4.4%で、いずれのグループもインターネット上での韓国に関する否定的な記事が多いと答えている。なお、グループ別の韓国関連の否定的記事を見かける率を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差は認められなかった ( $p>0.05$ )。

次は、好感度に影響する言語要因の分析結果である。

#### 4.2.2 言語要因への分析結果

##### (1) 韓国語への興味

ここでは、人々の会話や意思疎通のための重要なコミュニケーションツールである「ことば」への興味の度合いを分析する。表11に、韓国語への興味の有無の結果を示す。

表 11 韓国語への興味の有無

		非選択	選択	専攻	計
韓国語興味あり	人数 (%)	50 (26.2)	75 (75.0)	45 (100.0)	170 (50.6)
韓国語興味なし	人数 (%)	141 (73.8)	25 (25.0)	0 (0.0)	166 (49.4)

表11に示したように、韓国語に興味を持っているのは、「非選択」26.2%(50名)、「選択」75.0%(75名)、「専攻」は100%(45名)で、全体的には5割の人が興味を持っていると答えている。韓国語を選択科目として受講したり、専攻しているグループである「選択」「専攻」での韓国語への興味の高さは、当然の結果であると言える。なお、グループ別の韓国語への興味有無を、 $\chi^2$ 検定を用いて検定した結果、有意差が認められた ( $p<0.01$ )。

表11を、韓国語への好感度の結果である表5と照らし合わせると、まず、韓国語への興味を全員が持っている「専攻」は、好感度も9割ほどが好きと答えている。また、「選択」も韓国語への好感度は7割以上が好きと答えており、韓国語に興味があると好感度も高いことがうかがえる。一方、「非選択」は興味があるとの回答が3割未満と低く、好感度も好きでも嫌いでもないどちらとも言えないとする回答が6割以上である。すなわち、ことばを知らないため、具体的なイメージを持たず、消極的な好感度を表していることが分かる。また、逆に、韓国や韓国語に対する興味を持っている人が韓国語を選択、専攻していることから現れた結果であるとも解釈できる。

##### (2) 韓国語の言語学習

ここでは、韓国語非専攻・選択グループの学生だけに、韓国語を習ったことがあるかと聞いた結果を示す。返答の190名のうち、学習経験のあるのは20名(10.5%)であり、経験のないのは、170名(89.5%)である。次に、経験のない学生だけに、今後学習してみたいと思うかとたずねたところ、「習いたい」が49名(40.5%)、「習いたくない」は72%(59.5%)であった<sup>5)</sup>。

次に、協力者全員に対して、知っている韓国語を書いてもらった結果、「안녕하세요 (アンニョンハセヨ、こんにちは)」、「감사합니다 (カムサハムニダ、ありがとうございます)」、「사랑해요 (サランヘヨ、愛しています)」、「괜찮아요 (ケンチャナヨ、大丈夫です)」の順で知られている。また、「어머니 (オモニ、お母さん)」、「아버지 (アボヂ、お父さん)」、「선생님 (ソンセンニム、先生)」などの呼称、「김치 (キムチ)」、「비빔밥 (ビビンバ)」などの食べ物が多数を占めている<sup>6)</sup>。

## 5. 終わりに

以上のように、日本の大学生の抱く韓国、韓国人、韓国語への好感度及びその形成要因を、韓国語学習グループ別に分析した。その結果、まず、韓国に興味のある人は、好感度も高く、また、韓国語を選択、もしくは専攻している学生は、好きの好感度を持ちやすく、とりわけ、韓国語への好感度が非常に高く現れている。それに対して、韓国に興味のない人や韓国語に接していない学生は、好きの好感度を持ちにくく、国への興味がある、もしくはことばを知って、なんらかの形でその言語文化に接しているか否かによって、好感度に差が出ることが分かった。また、形成要因の興味要因、言語要因の分析においても、言語学習の有無による実態の違いがはっきりと現れており、国やことばに興味があれば、好感度に繋がること明らかになった。

これらの結果を、日韓の好感度を報告している金庚芬他 (2016c) に照らし合わせてみると、好感度においては、概ね「非選択」の結果が、他の世代の結果と類似している。すなわち、韓国語学習者の大学生を除く、ほとんどの調査対象は、韓国、韓国人、韓国語に対して、好きでも嫌いでもない消極的なイメージを持っている。それは、形成要因と関連しており、全世代では、国 (韓国) への興味が重要な要因になっている。さらに、本稿で取り上げた学習有無による分析によって、国への興味有無の他に、言語への興味及び学習が大きい要因になっていることも明らかになった。

今回は、日本の大学生の韓国への好感度及び要因分析に止まっているが、韓国の大学生の日本への好感度との比較を別稿にて報告したい。

## 謝辞

調査協力者、分析協力者の方々に感謝申し上げます。

## 注記

本研究は日本学術振興会の助成金 (平成 26 年度～平成 28 年度二国間交流事業共同研究「韓国と日本の自己イメージ及び相互認識」 (研究代表者: 金庚芬) の成果の一部である。

## 注

- 1) 韓国のイメージについては、鄭大均 (1995,2010) など数多くの書籍があるが、本稿では、言語学の範疇で実態調査を行った研究を取り上げる。
- 2) 韓国人の著者名は、姓名で示す。
- 3) 日本では、東京都及び首都圏の小学校、高校の計 285 校をランダムに抽出 (抽出率 10.4%。首都圏

40km 半径内母集団2,734校推定)し、最終的に6校(うち、2校は直接依頼)に、また、大学は直接依頼し、学生とその保護者(以降、一般人)から協力を得た。最終的に、小学5、6年生233名、高校1、2年生200名、大学生2～4年生368名、一般人895名の計1,696名の有効サンプルが得られた(有効回収率88.1%)。一方、韓国では、ソウル及び首都圏の小学校、高校、大学それぞれ2校、計6校に直接依頼し、小学5、6年生324名、高校1、2年生242名、大学生1～4年生(社会人除く)284名、一般人418名の計1,268名の有効サンプルを得た(有効回収率79.3%)。

- 4) これに関連して、金庚芬他(2016c)によれば、日本の大学生は、韓国に興味があれば、好感度も好き(「7、6、5」の評定)は72.9%(153名)、嫌い(「3、2、1」の評定)は7.1%(15名)であるのに対し、興味のない場合は、好き18.4%(25名)、嫌い30.1%(41名)で、興味の有無と好感度は強く関連している。
- 5) 対象の170名中、121名が回答してくれた。
- 6) 既知語彙の回答は、ハングル、もしくはカタカナ、ひらがなで書かれている。

## 参考文献

- 鮑戸弘・李姪善・塩田雄大・服部弘(2000)。「日韓テレビ報道比較調査研究日本と韓国・テレビはお互いをどのように伝えたか——1992年から1999年・対立から理解へ——」『NHK 放送文化調査研究年報』45, pp. 99-154.
- 生越直樹(2006)。「韓国に対するイメージ形成と韓国語学習」『言語・情報・テキスト』13(1), pp.27-41.
- 呉正培(2008)。「日本語学習者の日本人イメージにみられる特徴とその形成要因——韓国の大学における学習者と非学習者の比較——」『世界の日本語教育』18, pp.35-55.
- \_\_\_\_\_ (2012)。「日本人イメージに関する尺度の開発——韓国の大学生を調査対象に——」『日本学報』, 93, pp.65-77.
- 姜錫祐(1999)。「日本・日本語の印象形成とその変化」『国際社会と日本語』, 国立国語研究所, pp.81-90.
- \_\_\_\_\_ (2002)。「韓国における日本語のイメージ-日本・日本人のイメージとの関連から」『東アジアにおける日本語観国際センサス』国立国語研究所国際シンポジウム第6-8回専門部会報告, pp.55-66.
- 姜錫祐・國生和美・金志姫・金庚芬(2015)。「日韓の相互既知語彙に関する実態調査」『韓国日本語学会第32回秋季学術大会発表予稿集』, pp.165-170.
- 金庚芬・崔宰榮・関崎博紀・姜錫祐・染吉錫・國生和美・金志姫(2015)。「日韓の自己と相手に抱くイメージとその形成要因—好感度を中心に」『社会言語科学会第36回大会発表論文集』, pp.504-507.
- 金庚芬・崔宰榮・関崎博紀(2016a)『日本と韓国の自己イメージ及び相互認識に関する調査(日本)コードブック』.
- \_\_\_\_\_ (2016b)『日本と韓国の自己イメージ及び相互認識に関する調査(韓国)コードブック』.
- \_\_\_\_\_ (2016c)。「日本と韓国の相手国・人・ことばに対する世代別好感度及び形成要因」第248回朝鮮語研究会 発表資料 pp.1-27.
- 金庚芬・関崎博紀・崔宰榮(2016)。「日本人の韓国、韓国人、韓国語に対する良い・悪いイメージ—自由記入回答の分析結果を中心に—」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』, pp.83-87.
- 齊藤明美(2004)。「韓国の大学生の日本、日本人、日本語に対する意識とイメージ形成に影響を与える要因について」『日本語学』21, pp.35-56.
- 新プロ「日本語」総括版・研究班1編集(1999)『日本語観国際センサス単純集計表(暫定速報版)』国立国語研究所.
- 原由美子・塩田雄大(2000)。「相手国イメージとメディア—日本・韓国・中国世論調査から—」『放送研究と調査』3, pp.2-23.